

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520295

研究課題名(和文) エズラ・パウンドの経済論と創作原理 「利子」と「抽象」

研究課題名(英文) Ezra Pound's Economic Theories and Principles of Composition: "Usury" and "Abstraction"

研究代表者

長畑 明利 (Nagahata, Akitoshi)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：90208041

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、エズラ・パウンドの詩と詩論に見出される経済論と創作スタイルの関係、特に彼の「利子(高利)」批判と「反抽象」の姿勢の関係を明らかにすることを目的とした。研究の結果、パウンドの「利子」批判と「反抽象」の姿勢には関連性が認められること、「利子」批判が見られる『詩篇』において、しばしば、ファシズムや儒教に関連するトピックが連結されること、「利子」批判が顕著になる後期の『詩篇』において、初期の『詩篇』の創作原理であった「表意文字的手法」の性質が変化していることなどを確認ができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to clarify the relation between Pound's ideas about economics and his poetic style, especially the relation between his criticism of "Usury" and his stance of "anti-abstraction," seen in his poetry and poetics. Through the research, it has been confirmed that (1) Pound's criticism of "Usury" can be related with his stance of "anti-abstraction"; (2) in individual Cantos in which Usury is criticized, there is an attempt of showing links between this motif and topics related to Fascism and Confucianism; and (3) in The Cantos, as his attack on "Usury" becomes prominent, so does the compositional style of "reading-through," causing a change in the nature of the "Ideogrammic Method," arguably the central compositional method of The Cantos.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：パウンド 反抽象 高利 儒教 ファシズム

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者はこれまで、20世紀前半に活躍したアメリカのモダニズム詩人と「抽象」の関係を検証する研究を進めてきた。2005年度までに、Gertrude Stein、Wallace Stevens、Hart Crane、T. S. Eliotに見られる抽象観について考察し、2006～07年度には、Ezra Poundの能体験が彼の「漢字的抽象」の発展型である「表意文字的手法」の生成に果たした役割について、2008～2010年度には、パウンドの儒教受容とファシズムへの傾倒と「表意文字的手法」の変化について考察した。本研究は、これらの研究をさらに発展させるものとして構想された。

(2) 本研究が対象とした主たる問題領域は次の通りである。

### パウンドの経済学への関心

パウンドは、ロンドン滞在中に、*The New Age* 誌の編集者 A. R. Orage および同誌の寄稿者らとの交友を通じて、次第に政治・経済への関心を深めた。特に C. H. Douglas の「社会信用論」に傾倒した彼は、自ら経済論を発表するようになり、1930年代以後、“Murder by Capital”(33年)、*ABC of Economics*(33年)、“Banks”(35年)、“Social Credit: An Impact”(35年)、“What Is Money For?”(39年)、“Gold and Work”(42年、初出イタリア語)などの評論を発表し、また、33年の *Jefferson and/or Mussolini* や 42年の “A Visiting Card”(初出イタリア語)などでも、自らの経済論を展開した。これらの評論でパウンドは、紙幣を発行する権利を持ち、国に戦争資金を貸して利子収益を得る金融資本家もしくは金融組織を、国の財政の困難、さらには、度重なる戦争の原因とみなし、こうした無から利潤を生み出す行為を「強欲」一般と結びつけて、“Usury”(高利)の言葉で糾弾した。同時に彼は、このような野放しの利子利益獲得の制限と、強欲の抑制の方法を模索し、ダグラスの「社会信用論」をその実現のための方策として強く支持するとともに、「社会信用論」を実現しうる政治家および政治体制として、ムッソリーニおよび彼のファシズムを支持した。また30年代のパウンドは、ファシズム関与と並行して儒教への関心を深めるが、その儒教研究の根底には、個人の内面に共有される倫理意識が家族、社会、共同体、国家へと広がっていくとする考え—彼はこれを “directio voluntatis” と呼んだ—に対する関心があり、パウンドはそれを「利子」および強欲の根源的抑制に通じるものと考えた。

パウンドの抽象批判および創作スタイルと経済学的関心の関係

エッセイ “Retrospect” で、「抽象には恐れながら進むがよい」と述べたことから明らかなように、パウンドは、その詩人としての経歴の初期から、しばしば「抽象」を批判してきた。初期の散文において、「抽象」は具体的な事物が持つ「活力」を損なうものとし

て批判されたが、その後、イマジズムとヴォーティシズムの運動を経て、いわゆる「表意文字的手法」を駆使した『詩篇』を創作するに至っても、彼の「反抽象」の姿勢は維持されたように見える。一方、1930年代後半から、パウンドの『詩篇』は、あるテキストからの抜粋を順に並べていく reading-through の手法への移行を見せ、コラージュ性が希薄になる。異質な断片と断片の併置の性格は薄れ、同じ表現を反復するフーガの性格を強めるのである。こうしたパウンドの創作原理や創作スタイルの生成・発展は、彼の経済学的関心の深化とほぼ平行して起こったことであり、両者の関係の解明が求められる。

(3) パウンドの創作原理・創作スタイルの生成・発展と彼の経済学的関心の関係については、まだ多くの研究がなされているとは言い難い。例えば、Peter Nicholls, *Ezra Pound, Politics, Economics and Writing: A Study of the Cantos* (1984)、Jean Michel Rabaté, *Language, Sexuality, and Ideology in Ezra Pound's "Cantos"* (1986)、Richard Sieburth, “In Pound We Trust: The Economy of Poetry/The Poetry of Economics” (1987) などの先行研究があるが、これらの研究はパウンドの「反抽象」の姿勢との関係について考察するものではなく、また、パウンドの儒教研究への言及も不十分である。本研究は、パウンドの経済学的関心と創作スタイルの関係についての考察に際して、彼の「抽象」観との比較を基軸に据え、また、彼の儒教研究をも射程に収めたうえで行うものである。そのことにより、本研究は欧米の研究者による従来の研究成果をさらに深めることができるものと考えられる。

## 2. 研究の目的

(1) 上述の問題領域を研究対象とする本研究の目的は主として次の2点である。評論等に示されるパウンドの経済学的関心が彼の詩作品においていかに表現されるかを明らかにすること、パウンドの創作原理と彼の経済的関心の関係を明らかにすること、である。については、とりわけ、(i) 彼の創作スタイルに見られる「反抽象」の姿勢と彼の「利子」批判との関係を解明すること、(ii) 後期の『詩篇』に見られるスタイル上の変化と彼の経済学的関心の発展との関係を解明することである。

(2) より広い見地に立てば、これらの目的は、アメリカのモダニズム文学一般に窺われる革新的表現方法および「抽象」概念に対する関心を性格づけ、欧米文化圏で展開された革新芸術運動であるモダニズム文学と経済学的関心との連関性を明らかにするといふ、より包括的な研究目的の一部である。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は主として文献調査により遂行し

た。具体的には、パウンドの評論、詩作品および書簡を対象に文献調査を行い、彼の経済学的関心の発展を検証する、また、同様の文献調査により、パウンドの「高利」批判と「抽象」批判の関係を検証する、パウンドの経済観を反映する詩作品、特に、後期の『詩篇』の創作方法を、彼が利用した原テキストに照らし合わせて分析し、パウンドの詩における経済学的関心の表現方法を明らかにする、というのが本研究の研究方法である。(2) 文献調査において対象とした主たる文献は次の通りである。

『詩篇』を中心とするパウンドの詩作品

シエナの Monte dei Paschi 銀行(牧草地銀行)を題材とする「詩篇 42~44」, 「利子詩篇」と呼ばれる「詩篇 45」や、その続編とみなしうる「詩篇 50」、オーストリアの Woerl における stamp scrip の実践とそれを推奨した経済学者 Silvio Gesell をめぐる「詩篇 74」、ビザンチン帝国の商業マニュアル *Eparch's Book (Eparchikon Biblioni)* を扱う「詩篇 96」、雍正帝の儒教に基づく処世訓「聖諭廣訓」を民衆に広めようとした清の製塩長官王又僕を扱う「詩篇 98」など。

主として 1930 年代、40 年代に書かれたパウンドの経済論

“Murder by Capital”(33 年)、*ABC of Economics*(33 年)、“Banks”(35 年)、“Social Credit: An Impact”(35 年)、“What Is Money For?”(39 年)、“Gold and Work”(42 年、初出イタリア語)、*Jefferson and/or Mussolini*(該当箇所のみ、33 年)、“A Visiting Card”(該当箇所のみ、42 年)など。

C. H. Douglas の *Social Credit* など、パウンドに影響を及ぼした経済学関係書

「詩篇 96」の執筆に用いられた *Eparch's Book (Eparchikon Biblioni)* をはじめとするソース・テキスト。

(3) 文献調査に加え、パウンドの経済的関心が示されるルネサンス、ビザンチン関係の詩篇の背景を探るために、リミニ、ラヴェンナにて調査を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 研究の結果、パウンドの詩論と経済学的関心の関係について、次の知見を得た。

パウンドの高利批判は彼の詩・評論に一貫して認められるが、その批判には自然・具体物からの乖離の指摘が含まれ、そこに「抽象」への批判との連動性を見て取れる。この点については、紙幣・貨幣の呪物性の議論を媒介にして、さらに検討を進め、論文にまとめて発表する計画である。

高利を制限するための手段として、パウンドはファシズムを支持し、また、儒教道徳に学ぶことを説いたが—それゆえ、『詩篇』においても、彼の高利批判はしばしばファシズムもしくは儒教への言及の中に現れる—、後者の根幹としてしばしば言及される、個人から国家に至る政体内各層を貫く倫理的一体

性の概念(“directio voluntatis”)は、テキストの全体が相互に独立した個々の部分からなるとする有機体的視点と関連性が高い。このことは、抽象による個および具体的経験の消失を批判するパウンドの「反抽象」の詩学ならびにそれに基づく「表意文字的手法」とも連動する。この点については、さらに検討を進め、論文にまとめて発表する計画である。(2) 後期の『詩篇』における創作スタイルの変化については、コラージュ性が希薄になることに伴い、相互に独立した断片と断片の併置を根幹とする「表意文字的手法」そのものの性格に変化が生じているとする仮説を得た。この点については、以下の[学会発表]7)において部分的に発表した。

(3) これらに加え、1910 年代と 30~40 年代の社会・政治状況におけるパウンドに関して次の知見を得た。

1910 年代のパウンドが「辺境主義」を批判し、異なる国同士の「交易」と「交通」の重要性を主張したこと(『雑誌論文』5)にて発表。

戦間期に復活したフェノロサ草稿への関心は詩人の単なるノスタルジアの表明にとどまるものではなく、国際情勢を反映するものであったと考えられること(『学会発表』5)にて発表。

(4) 本研究によって、パウンドの詩における彼の経済学的関心の表現方法を明らかにし、また、パウンドの創作原理と彼の経済的関心の関係を明らかにするという 2 点の研究目的は、問題の大きさゆえに不十分な点はあるものの、おおむね達成されたものと考えられる。今後は、本研究の成果をさらに論文・口頭発表の形で発表していく計画である。一方、「表意文字的手法」の変化に関する仮説など、本研究によって、新たな研究の発展の可能性が生まれた。この点についても、さらに研究を深め、同じく論文・口頭発表の形で発表していく計画である。また、パウンドの経済論の研究については、彼の膨大な歴史についての知識の検討の重要性を新たに認識することとなった。今後は、経済について書かれたパウンドの文章を、彼の歴史理解と関連づけて考察することが研究の課題となる。彼のファシズム支持および儒教への傾倒も、彼の歴史観との関連のもとに改めて議論されるべきであろう。パウンドの経済論と彼の創作理念との関連性の研究は、パウンドの歴史解釈の研究と連動させることにより、さらなる展開が見込まれる。それにより、アメリカのモダニズム詩人と革新的表現方法および「抽象」についての研究をさらに進展させることができるはずである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

1) 長畑明利、「陳昴与耶穌会：《詩章》59 至

61 章中的冲突与儒学」(尚曉進訳)、*English and American Literary Studies* 14、2011、pp. 41-47、査読なし。

2) 長畑明利、「ミナ・ロイの越境と修辞—初期詩篇を読む」、『境界の消失と再生—19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学』基盤研究(B)(科学研究費報告書、課題番号20320054、代表西川智之)、2012、pp. 43-65、査読なし。

3) 長畑明利、「自己を書くこと、みんなを(と)書くこと—ガートルード・スタインの『みんなの自伝』」「マーク・トウェイン 研究と批評」11、2012、pp. 49-58、査読なし。

4) 長畑明利、「アジア系アメリカ人詩人による言語実験とアイデンティティー—テレサ・ハッキオン・チャとミュンミ・キムを中心に」、『文化表象のグローバル研究—研究成果中間報告』(北山研二編、成城大学グローバル研究センター)、2013、pp. 113-126、査読なし。

5) 長畑明利、「「偏狭さ」に抗して—エズラ・パウンドの「ルネッサンス」構想」、『アメリカ研究』47、2013、pp. 41-57、査読なし。

6) Nagahata, Akitoshi, “Theresa Hak Kyung Cha’s Playful Writing in *Exilée* and *Temps Morts*”, *Foreign Literature Studies* [『外国文学研究』] 35.5, 2013, pp. 23-29, 査読なし。

#### 〔学会発表〕(計 8 件)

1) Nagahata, Akitoshi, “Revisiting the Fenollosa Manuscripts in *The Japan Times*: Pound’s Language of Nostalgia and the International Affairs”, The 24th International Ezra Pound Conference, 2011年7月7日、ロンドン大学。

2) Nagahata, Akitoshi, “Tender Buttons as Poetry of Mock-Explanation”, Dialog on Poetry and Poetics: The 1st Convention of Chinese / American Association for Poetry and Poetics, 2011年9月30日、華中師範大学(武漢)。

3) Nagahata, Akitoshi, “Rereading Wallace Stevens in the 1930s”, “Revisiting the 1930s in American Literature and Culture” (国際言語文化研究科アメリカ文学・文化シンポジウム)、2012年3月11日、名古屋大学。

4) 長畑明利、「女ビート再考」, “neatly and modestly dressed, speak quietly but do not mumble, respect their elders”—1950年代のアメリカの女性詩人たち」(日本英文学会全国大会シンポジウム)、2012年5月27日、専修大学。

5) 長畑明利、「パウンドと『新しき土』—*The Japan Times* 寄稿記事に見るノスタルジアと日中関係」, 日本アメリカ文学会中部支部例会、2012年6月16日、中京大学。

6) Nagahata, Akitoshi, “Theresa Hak Kyung Cha’s Playful Writing in *Exilée* and *Temps Morts*”, The 2nd CAAP [Chinese /

American Association for Poetry and Poetics] Conference (International Symposium on Modern and Contemporary Literatures in English), 2013年6月9日、華中師範大学(武漢)。

7) Nagahata, Akitoshi, “Economic Exchange and Juxtaposition in Canto 96 and 97”, The 25th International Ezra Pound Conference, 2013年7月12日、トリニティ・カレッジ(ダブリン)。

8) Nagahata, Akitoshi, “Vietnamese Chefs in Alice’s Kitchen: Stein, Toklas and Indochina”, American Literature/Culture in a Global Context (国際言語文化研究科アメリカ文学・文化シンポジウム)、2014年3月6日、名古屋大学。

#### 〔図書〕(計 2 件)

1) 『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』(世界思想社、2011)(共著)[植木照代監修、山本秀行・村山瑞穂編]

2) 『あめりか いきものがたり—動物表象を読み解く』(臨川書房、2013)(共著)[辻本庸子・福岡和子編]

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

長畑 明利 (NAGAHATA, Akitoshi)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号: 90208041